

☆ 7月・8月・9月・10月の活動計画☆

採集観察会のお知らせ

第二回 7月24日(日), 第三回10月23日(日)共に10時集合

集合地点: 神奈中バス停「野津田車庫」(小田急線町田駅西口またはJR線横浜線町田駅中央口下車、町田バスセンター1番「野津田車庫行き」に乗車。20分後終点下車)

世話人は小峰光弘 TEL. 0422-22-8647

合宿のお知らせ

7月30日(土)午後3時から8月1日(月)午前10時まで、神奈川県足柄下郡真鶴町にて。(詳細は別ページ合宿案内参照)

世話人は池田博明 TEL. 0465-82-2105.

例会/総会の報告

1988年6月12日(日)、大橋区民会館にて、10時~17時。〔出席者: 浅間茂、池田博明、磯部達男、稻葉茂代、井上房江、小沢実樹、小野辰嗣、萱嶋泉、国見裕久、小峰光弘、熊田憲一、笹岡文雄、貞元巳良、佐藤幸子、新海明、新海栄一、高橋祐子、谷川明男、田副幸子、八木沼健夫〕

1. 挨拶(萱嶋泉)

2. 総会(議長に小沢氏を選出)では、下記事項が報告されました。

【事務局】1987年度は秦野市大倉にて5月・10月・2月に採集会、7月は合宿に統合した。【会誌編集】87年度分は56号を発行、もう1号を準備中(ふるって原稿をお寄せ下さい)。【通信編集】年3回発行する予定。【会計】会誌が1号未発行のため繰越金(78,7720)がある。【年間活動】採集観察会・合宿は別項を参照、冬の合同例会は多足類の担当であり事務局への連絡を待ちたい。【予算案】別項参照。

下記事項は運営委員会の検討課題となった。

【会誌】バックナンバーの状況調査(KISHIDAIAのバックナンバーを保管されている旧事務局の方は至急、熊田まで号数と冊数をお知らせ下さい)。【談話会20周年記念事業】記念誌などの検討。意見を運営委員までお寄せ下さい。【会長】萱嶋氏を名誉会長に推す件(萱嶋氏より辞退の弁あり)。

審議の結果を列挙する。【規約改正】明記されていなかった「入会」「退会」項目を追加、団体(たとえば生物部)は代表者が個人会員として入会する形とする旨を追加(会誌次号にも掲載する。「規約」は別紙にて同封した)。【新運営委員の選出と承認】別記の様に決定した。【会誌を博物館に寄贈】関東の自然誌博物館を中心にKISHIDAIAを寄贈することを決定した(現在の印刷部数は180部、会員数は120名)。印刷部数の増加の意見が出たが、保管場所が確保できないので現部数のままとなった。

3. 講演発表

- (1) 新海栄一「最近撮れた珍しいクモと普通のクモ」；北海道にてマユミテオノグモ（頭胸部が金または銀色で美しい），フタスジヒメグモ，セアカヒメグモ，タカネエビスクモ（色彩変異が多い），エゾガケジグモ（ボロ網を張る。夜間に側溝を見る）など。本州にてホオジロハエトリ，シボグモモドキ，ミヤマシボグモモドキ，ミヤマタンボグモ，クロマルイソウロウグモ，クマダハナグモ，カガリビコモリグモ，アリマネグモ。沖縄にてハラビロスズミグモ，ヘリジロツケオグモ，ケアシハエトリ。
- (2) 萱鳴泉「バイカル湖畔のリストビアンカ村のクモ」；ニワオニグモを採集してくれた人あり。萱鳴宅では夕方から網を張る。棒の中に網を張らせてると円網の下方が長いペロ形になるが、足場糸を切ってやると正円になる。シベリアは自然の宝庫である。
- (3) 小野辰嗣「タイ・マレーシア報告」；87年の7～8月に4地域にわけて調査した。溪流沿いの湿った所でハラフシグモを採集する。アオハブもいるので注意。洞窟性のハラフシグモやヤリグモsp., ドウナガカニグモ, イワガネグモsp., ハエトリsp., オヒキグモsp., トリノフンダマシspなどを採集。
- (4) 谷川明男「ニセキクヅキコモリグモについて」；宮城県伊豆沼にて芦原を踏むと出てくる。年2回発生する。夏型が小さく、色が薄い。交接を観察した。斎藤三郎の図鑑のキクヅキコモリはニセキクヅキか。
- (5) 新海明「沖縄クモ観察記」；ボルティアハエトリ（ケアシハエトリ）が日本にもいた。造網性のクモの網に侵入し、網主を襲う。オオジョロウグモの婚礼ヴェール。どんな適応的意義があるのか。
- (6) 浅間茂「わら巻き内のクモ」；87年の10～12月に様々な樹に巻いてみた。上下の巻きわらの間に粘着テープを巻いたが、テープははがれてしまった。多いクモはヤマトクログモ、アサヒエビグモ、カマクラヌカグモやカニミジングモなど。
- (7) 八木沼健夫「最近のクモ雑話」；オオツリガネヒメグモはアメリカで記載されていた。学名は *Achearanea tabulata* LEVIとなる。学名未定だったジャバラハエトリはH. yaginumai PROZYNSKI 1987となった。シーワルドがハヤテグモの雌雄標本を求めている。キヨヒメグモはデメキリグモ（斎藤三郎記載）か、キヒメグモの変異型か。カタオカハエトリとイワテハエトリはあきらかに別種。平島・大熊氏と共に著でクモの学名の本を執筆中。その本に盛り込む話題を色々。学名についてまだ不明な点として「スズミ」グモや「イズツ」グモの語源、「ハイバラ」ワシグモの棲原は三重か静岡か、「マキ」ジョウゴグモの語源は？、「Wendilgarda」の語源は？。

短報

糸会を描くワシグモ

稻葉 茂代

「糸会を描くクモがいる」と聞いて、信じますか。いるんです。糸会を描いているように見えるんです。このクモの糸会の具は土、キャンバスは卵のうです。

1988年6月11日（土），小田原城内高校で飼育中のワシグモが卵のうを作っていました。18時40分頃、しきりに管ピンの栓のスポンジをかじって卵のうに運び、押し付けているので、カモフラージュのつもりかと思い、土を少し入れてやったのです。以前

にウラシマグモの仲間が卵のうの上に土片やゴミを付けるのを見ているからです。ワシグモは私が入れた土片を口の中でこねまわし、頭胸部を左右に振りながら、卵のうに押し付けるようにして、絵を描き始めたのです。最初は葉脈のようでした。あまり珍しい光景なので、一人で見るのはもったいない、他の部屋で仕事中の池田先生に「一見の価値がありますよ」と校内電話を入れてしまいました。それは本当に土の絵の具を口でこね、口を絵筆に卵のうに絵を描いているようでした。だんだん絵のすき間が土の絵の具で埋まり、少しピンクがかかった白い卵のうが土色に変わっていきます。池田先生もひたすら感心していました。こんな情景をみなさんにも見てほしいと思いました。

でも、もうその絵はありません。絵を描き始めて約1時間後、今度は3時間かけて糸でその絵をすべて隠してしまいました。こんな観察の機会に立ち会えることは、そう何度もあることではないかもしれません。いずれワシグモの名前がわかりましたら、改めてちゃんと報告したいと思います。とりあえず、みなさんにお知らせしたくて！

1988.6.11記

新運営委員と連絡先

本部：小野辰嗣 〒160 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部

事務局（会計）：熊田憲一（別記）

会誌編集：谷川明男 〒223 横浜市港北区新吉田町1523

通信編集：池田博明 〒258 足柄上郡大井町金手1099

運営委員：上記4名の他、板倉泰弘・井上房江・笹岡文雄・新海明・高橋登。

真鶴（まなづる）合宿について：参加申し込みをされた方には案内を送ります。

「予約金」が必要ですので、郵便振替で「池田博明」まで払い込んで下さい。

~~~~~ 参加申し込み要領 ~~~~

1泊1名につき2000円。郵便振替用紙の裏の通信欄に必ず、次のことを記入して下さい。【宿費は1泊6000円。諸雑費を含め6500円と予定】

(1) 泊まる月日：7月30日(土)か31日(日)か。

(2) 泊まる人数；子供づれの家族は別棟(宿のまん前)を用意しますので、子供の年令もお知らせ下さい。小学生以上は宿費は同額ですが、子供については予約金は不要です。

(3) 電話番号；変更などをお知らせします。 (4) 「合宿参加」と一言

~~~~~ その他 ~~~~

(1) 夜間観察のため懐中電灯、虫よけは必ず。実体顕微鏡は用意します。

(2) 自家用車で来られる方は振替の通信欄にそのことを書いて下さい。

(3) 宿は「新栄荘」(真鶴町無線下1008、電話0465-68-0657)

岩の海水浴場側ではなく、真鶴半島側です。参加者には交通の案内をします。

☆郵便振替は「横浜0-17837、池田博明」【7月15日(金)まで】

「会員近況」（総会例会の返信葉書に書いていただきました近況をお知らせします）

板倉 泰弘：スジアカハシリグモの幼体の造る網に関して卒論を書く準備をしています。6月6日から18日まで教育実習で愛知に帰らねばならず、例会総会に出席できず、残念です。

佐藤 幸子：住んでいる地域の自治会事務局の任期が3月一杯で終わりました。総会・例会・採集会・合宿みんな御無沙汰していましたが、今年からまた出席出来そうです。何とぞよろしくお願ひいたします。

田中 穂積：毎日忙しく動きまわっています。もっとクモにかける時間が欲しい！！

小澤 實樹：ただ出席のみの、会員ですみません。でも、何卒よろしく。ただ、毎日一度はクモのことを考えます。

高田 勝：4月末より、約2ヶ月の予定で、英國からスカンジナビアへの旅に出かけました。ヨーロッパのクモも見てくることでしょう。

馬場 武彦：御無沙汰しています。会の成功をお祈りしています。

石野田辰夫：（住所も名前も昨年と同じ、年は1つ多くなりました） 総会・例会が盛会であるよう祈ります。一度も出会ったことがなく申し訳ありません。今年はぜひ会誌に原稿を寄せることで参加したいと念じていま。よろしくお願ひします。唯今、毎日ズグロオニグモに面会しています。調子のいい時と悪い時が激しくて、シチメンチョウの顔のようです。昨日は110匹だったのに今晩はたったの6匹でした。明日はどうなることやらお天気しだいと言うわけです。でも明日が来るのが楽しみです。頭髪は白いのがいっぱい、でも早く来い希望の明日と行った感じです。

千国安之輔：都合により、出席できません。元気であります。あしからず。御盛会を祈ります。

新海 栄一：商工会や街づくりのための活動ばかりでクモのほうは開店休業の状態です。昨年出版した「クモ基本50」はおかげさまで大変好評ですので別の形の続編を考えております。

八木沼健夫：初めての出会い、よろしく。旧人類としての感想を若干述べたく思っています。会長・CIDA日本委員を退任して、気分的にはほっとしていますが、まだ残務が尾を引くでしょうし、対外国の仕事も今後も続き、忙しさは変わりないと思いま。退官もせまっており、余生も次第に少くなりつつありますが、研究は続けたいと思っております、よろしく。

斎藤 博：急遽、栃木から山梨の方に転居してまいりましたが、少しづつこの地にもなれてまいりました。また、皆様と蜘蛛談義が出来ること楽しみにしております。新たな就職先も休日が多く、何かと自分の研究も今まで通りやっていけそうです。今後ともよろしくお願ひ致します。

中平 清：昨年からアオグロハシリグモの生態に取り組んでいますが、なかなかはかどりません。それは、個体数の少ないと原因があるように思っています。つま

り、研究材料の少ないことが、小生の小さな能力に加算されて、弱ったことになって
いるのです。今年は何とか……。

古川 渉：新規入会いたしました。

磯島 隆：住所変更しましたのでよろしく。

小林 健一：勤務先がこの4月で変更になりました。

須賀 琢文：4月から職場もかわり、また日本蜘蛛学会大会（名古屋）での準備もあり、毎日忙しくすごしております。名古屋での大会にはぜひ多数ご参加下さい。

加村 隆英：おかげさまで、今春大学院を修了いたしました。現在はひきつづき、研究生として大学に在籍しており、週に3日間は高校の非常勤講師として、生物を教えています。

緒方 清人：手持ちの不明種、主にサラグモ・コサラグモをばちばちとかたずけています。新緑の季節、野山を歩きたくムズムズしています。

新海 明：本年3月をもって国立音大付属音高を退職しました。暫くはクモの勉強をやり直したいと思っています。

梅林 力：今年また5年生の担任になり、今年、来年と忙しい年になりそうです。少しは、のんびりしたいと思っているのですが——。

萱嶋 泉：皆さん御元気でクモの研究をされていると思います。東京蜘蛛談話会も発展したものと存じます。感謝です。

井上 房枝：先日本を読みながら壁の隔を見ると、壁の隔からヤチグモの巣が出てきました。以前から巣を気にして見ていましたので、だいぶ大きくなったりヤチグモを見てほっとしたのですが、このヤチグモ、ヒラタグモに追いかけられることが多いなかなか遠くへ出られないようです。

吉田 哉：勤務先が変わり、あわただしい毎日です。研究の方は手がつきません。これから何とかしたいと思っております。

菊屋奈良義：只今、イノシシ15頭、タヌキ12頭、テン1頭、ノウサギ2頭、イタチ1頭、フクロウ3羽と毎晩つきあっています。5月8日で満1年になりました。キジロオヒキグモがいた柞原のシイ林で、リターに座り込んで楽しい夜を過ごしているところです。

長島 忠義：6年ぶり（小笠原2年、マレーシアペナン3年）に桜の花を見ました。

（3月20日帰国）日の出町立平井小学校に勤めています。今のところ忙しくて身動きが出来ません。

小池 牧子：金欠病のため死んだふりして過ごす毎日かな？クモのアクセサリーが近じか手に入りそうですが割りと高価なのです。誰か買いませんか。

福本 伸男：私の勤務校で一緒に仕事をしたことのある森充さんが、先日突然訪れてきて、最近の関東地方の色々な話（クモの研究も）をしてくれました。千葉の高校に勤めています。数え切れないくらいの研究会に入っているので、談話会にはまだ入っていないと思いますが、さそってあげてください。コサラグモに関心があるようです。私自身は、公務に追われ、ヤングを激励するばかりです。

吉谷 昭憲：最近は忙しさが定着してしまって、フィールドへ出かける時間も少なくなってしまいました。この春も殆ど出られず、欲求不満気味です。今年は私の地元での採集観察会を行なってくださるとのこと、できるだけ参加させていただきたく思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

鈴木 勝浩：今年、教員になって5年めになります。この4月から新しい学校になったわけですが、ようやくなれてまいりました。クモとだいぶ離れていましたので、かわいいクモのことを忘れてしまったようです。学校というところも、ようやくわかつてきましたので、談話会の皆様に、お世話になろうと思っております。

近藤 昭夫：今年度の前期は毎週講義3回、ゼミ2回、会議2回、5月中旬までは週4日実習が加わり、目の回る忙しさです。3月末に山形県の赤湯の460mくらいの丘の上でカモシカにバッタリ出会いました。目もとがなんともかわいらしく、しばらく2人(?)で見つめあってきました。

高橋 祐子：新しい学校にも慣れてきたので、そろそろ始めようか……と思いながら学校でつかれてしまう。という毎日をおくっています。

小野 展嗣：博物館でクモ学入門講座なるものを開いたところ、結構人が集まつたので驚きました。何かを研究してみたいと思っている潜在人口は意外に多いのではないかでしょうか。そんな人たちの関心をクモへ向けるために、私たちも、大いにクモ学の面白さをPRしようではありませんか。

片岡佐太郎：野山をカケズリ廻ってます。何をしているのでしょうか。自分でも余りはっきりしません。みちのくの自然を荒らさないよう、そしていつまでも保存できい乍ら何かが前途を防いでいます。もうもうのこと障害になったり、助けになったりです。役員の方々ご苦労様です。

大野 智子：今年の夏に結婚することになり、とらばーゅしました。今はまたクモと遠く、歯と骨の勉強をしています。御茶ノ水の東京医科歯科にいるので皇居が近く、ぶらぶらクモをみたりしています。最近はよくメディアのなかからもクモの話を見ることが増えたみたいですね。皆さん、元気でがんばってください。

稻葉 茂代：いよいよクモも活動を始めたので、私もまた、活動を開始しようと思っています。

斎藤慎一郎：中小企業のモーレツ社員をやりまして野良へ出られなくなりました。もうじき脱出するつもりですが、さてこれからの運命やいかに？

貞元 己良：忙しい毎日ですが、たぶん出席できると思います。しかし、予定は予定で、出席出来ぬときは、スミマセン。

* 4頁以降は熊田氏の厚意による。

昭和63年度予算

収入の部

収入計	1, 122, 920円
会費	
① 一般 2800円×119人	333, 200円
② 学生 2000円×1人	2, 000円
小計 -----	335, 200円
昭和62年繰越金	787, 720円

支出の部

支出計	1, 122, 920円
刊行物作成費	
会誌 100, 000円×4回	400, 000円
通信 1, 000円×4回	4, 000円
小計 -----	404, 000円
通信費	
会誌発送 170円×120人×4回	81, 600円
通信発送 70円×120人×4回	33, 600円
総会等返信 40円×120人×2回	9, 600円
事務通信費	10, 000円
小計 -----	134, 800円
備品費 (ゴム印等)	5, 000円
消耗品費	5, 000円
予備費	27, 200円
中計 -----	576, 000円
次年度繰越金	546, 920円

事務局会計 熊田 憲一

会計だより 郵便振替口座 東京 7-74885 東京蜘蛛談話会
(敬称は略させていただきます)

△費支領 昭和63年4月~6月中頃 (一般2800円・学生2000円)
昭和61年(1986年)度 斎藤 博・浜田 竜一・安藤 昭久・
米田 宏・貞元 已良・河又 和夫・立川 晴二・山本 一博・大利 昌久・
国見 裕久・根本 久・城内高校生物研究会。
昭和62年(1987年)度 西川 喜朗・斎藤 博・浜田 竜一・
安藤 昭久・米田 宏・貞元 已良・河又 和夫・稻葉 茂代・立川 晴二・
山本 一博・大利 昌久・鈴木 勝浩・松本 誠治・国見 裕久・林 俊夫・
根本 久・城内高校生物研究会。
昭和63年(1988年)度 西川 喜朗・斎藤 博・中平 清・
浜田 竜一・安藤 昭久・米田 宏・貞元 已良・河又 和夫・稻葉 茂代・
谷川 明男・田副 幸子・佐久間良三・吉倉 真・立川 晴二・山本 一博・
笠原須磨生・小野 展嗣・吉谷 昭憲・大利 昌久・大熊千代子・鈴木 勝浩・
木藤 幸雄・片岡佐太郎・八木沼健夫・松本 誠治・浅間 茂・磯部 達男・
米山 明美・国見 裕久・高橋 祐子・高橋 登・大野 正男・増原 啓一・
林 俊夫・根本 久。
昭和64年(1989年)度 熊田 憲一・大熊千代子・磯部 達男・
佐藤 幸子・林 俊夫(400円)。

寄付

熊田 憲一(155円)・第18回総会例会出席者一同(1745円)。

△員移動

(住所変更・転居・改称)

磯島 隆 〒039-01 青森県三戸郡南部町大向字小波田17-1
新海 明 〒185 東京都国分寺市本多1-6-6
長島 忠義 〒197 東京都秋川市油平167-3 西秋留ハイツ301
大野 智子 〒120 東京都足立区足立1-13-16 ヨーポ大川102号室
山本 一博 〒290 千葉県市原市辰巳台西2-14 古河電工社宅144棟8号
中平 清 〒781-03 (781-02から郵便番号変更)
城内高校生物研究会→米山 明美(規約4-Ⅲ適用による個人名への改称)

会員名簿訂正:貝発 憲二氏→貝発 憲治

吉田 哉氏 山形市竜田 →山形市竜田

伊佐地利行氏 削除→昭和62年度にて希望退会しております。

事務局(会計を含む) 〒221 神奈川県横浜市神奈川区片倉町199 熊田 憲一
領収証の必要な方は振替用紙通信欄にその旨お書きください。

昭和63年2月13日(土)

《八木沼健夫 提供》

日本 亲 手 刊 (アキコ)

(第3種郵便物認可)

新聞定価1ヶ月2,800円・1部(朝刊)80円(夕刊)40円

九大農学部 教務員の大熊さん

同女学校卒業後、福岡県

九州大学に」のまじ「女性の「クモ(蜘蛛)博士」が誕生した。クモの研究で博士号を取ったのは九大では初めて、女性のクモ博士は今更珍しいことだ。「教務員としての研究室の隣の下の方持続的で継続的な、コツコツと毎年にわたる努力が異いたものだわ」と博士の称号が余計に光る。



女性クモ博士誕生

アシナガグモ

縁の下・コツコツ研究40年

分類の誤り立証

クモ博士になったのは九大く分布する「アンナガクモの研究」の博士論文が、十日に開かれた農学部教授会で博士号を授けられた。福岡市博多区で生まれた世界中に広く分布する「アンナガクモ」の世界的分類。

大熊さんによると、その由来には、四十多年前の旧制福岡高等学校(現西福岡高校)生徒時代、同級に命じてトニンパンの草むしをしたところ、虫を捕まえていたのが「アンナガクモ」。体真っ赤で、しかも細い体だが、体の三倍ある長さがあった。カマキリのオノのようになると、見えた。大熊さんは「平時教諭が、それまで、昆虫好きの兄に連れて、ホウウムシを採集したが、ひと際、心地いいものがあった。

「クモ博士」になって喜びの大熊さん

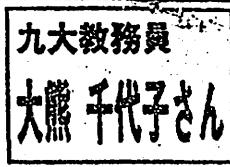
博士論文の研究テーマは「アンナガクモの世界的分類」。例を挙げると、学名「テトラクノータ・ヤボニカ」通称「ヤサガタアンナガクモ」は、日本にしかいないと思われていたが、大熊さんの研究で一八七五年にヒルマで命名された「テトラクノータ・ヤキンローサ」と同様と判断、命名権を確立した。

博士論文の研究テーマは「アンナガクモの世界的分類」。例を挙げると、学名「テトラクノータ・ヤボニカ」通称「ヤサガタアンナガクモ」は、日本にしかいないと思われていたが、大熊さんの研究で一八七五年にヒルマで命名された「テトラクノータ・ヤキンローサ」と同様と判断、命名権を確立した。

アシナガクモ博士

女性の「ハサ（蜘蛛）博士」が、大熊千代さんとの出会いは四十歳前後。西親王院の虫類教室で「教練員」として、虫類研究の草むしりをしたところ、樂をえた。それで、大熊千代の下で大熊が虫類の役割を幾年いたり続いたが、その間、女性の研究の成績。指導教授は「よく、蜘蛛をかぶるんだ」と、慈意を込めて笑っていた。

女性の「ハサ（蜘蛛）博士」が、大熊千代の虫類の出合いで四十歳前後。西親王院の虫類教室で「教練員」として、虫類研究の草むしりをしたところ、樂をえた。それで、大熊千代の下で大熊が虫類の役割を幾年いたり続いたが、その間、女性の研究の成績。指導教授は「よく、蜘蛛をかぶるんだ」と、慈意を込めて笑っていた。



アシナガクモの研究」の博士論文が、張りついたのがアシナガクモ。博士論文の研究テーマは「アシナガクモの世界的分類。日本におけるアシナガクモ」は、「ハセキチ」として、アシナガクモは四百四十六種類がいる。アシナガクモは、アシナガクモと同種の判断

した。大熊さんの研究によれば、アシナガクモは、「ハセキチ」として、アシナガクモは四百四十六種類がいる。アシナガクモは、アシナガクモと同種の判断

した。大熊さんの研究によれば、アシナガクモは、「ハセキチ」として、アシナガクモは四百四十六種類がいる。アシナガクモは、アシナガクモと同種の判断

した。大熊さんの研究によれば、アシナガクモは、「ハセキチ」として、アシナガクモは四百四十六種類がいる。アシナガクモは、アシナガクモと同種の判断



アシナガクモの種類を半分以下に分類・整理

珍種クモ 国内にも居た

長野 47年ぶり生息確認

【松本】長野県安曇郡白馬村の犀川で、四十七年前に島列島で確認されて以来日本国内では未確認だったクモの珍種・タイリクコモ(?)が生息していることが分かった。日本蜘蛛(?)の学会は「半島近くで珍種の発見」と高く評価。近く地元の学会員が査定予定の「写真日本くも類図鑑」で詳しい生態を一般に発表する。

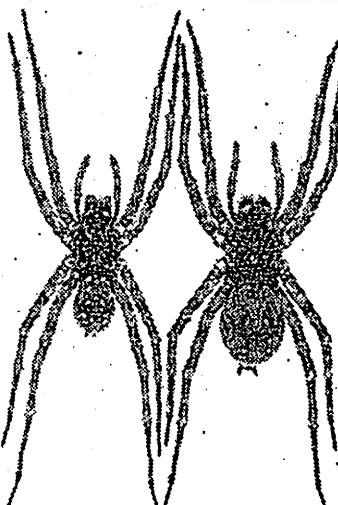
発見したのは高坂田沢のクモ(?)店経営上鶴賀さん(左)。昨年六月、奥飛騨の田沢橋上流の中州で野鳥を観察中、チドリが大きなクモを捕食していくのに気がつき、このクモを採集。蜘蛛学会(?)の千国安輔さん(右)=同町農科=に持て渡された。

千国さんは初めて見るクモに驚き、同学会員で「モリクモ科の研究者」田中聰穂博士=大阪市在住=に鑑定を求めた。その結果、主に北欧に分布し、わが國では昭和十六年北大の齊藤三郎博士が千国博士によって発見され、だんだん状に固

めて外に出す。住居作りの様子で発見され、タイリクコモ(?)と命名され、國內では未発見のクモであることが分かった。

発見されたタイリクコモ(?)は、が金糞十五ミリ、脚が十三ミリ。白色と鮮やかな黒色の花模様が似合っているのが特徴。生態について世界中の文獻にも記載されていなかったが、千国さんが今回初めてレンバードされた。

砂地に管状の住居を継め、口字状に四一五ガラの姿をしており、半球形でひざがいてある、だんだん状に固



タイリクコモリグモ

メス(右)
オス(左)



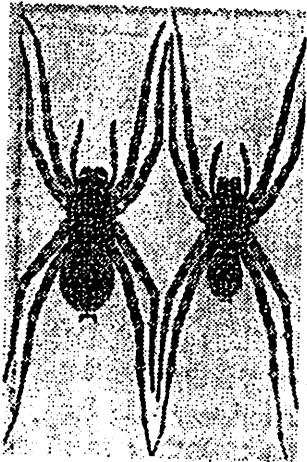
発行所
中日新聞本社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
電話名古屋052(201)8811
〒460-11 鹿児島県名古屋9-10号
© 中日新聞本社 1988

廿世紀の珍種発見

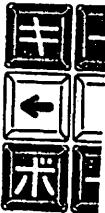
●タイリク「モリコグモ」

長野県・農科所の園三の池のいたるところにいた。

原で、クモの珍種「タイリク モリコグモ」の生息が確認され、これが日本で最初の記録である。日本では四十七年ぶりにこの部分を含むいわき・山形の地元新聞が近づいて取材する。「日本クモ類図鑑」でもその生態を発表する。



タイリクコモリケモ
(右がオス、左がメス)



ぐれこ。全身が白黒のしま模様で、胴体には花のめぐらしがある。

千葉県で北大の森謙三郎博士が発見、タイリクコモリケモ(和名)と命名したタイリクコモリケモ。

あるいは「大の虫」で呼んでいたが、発見されたかったのではないか。全国の河原に分布してこの可能性があると語っている。

しかし、金剛山深沢園一千五百メートル付近、金剛系の固子谷に近い外に出すほど、特徴的な作りがわかることが分かった。

た。



巣地に危険な獲物を食するハチの生態

「ハチ」このカリウハチたちばかりは、何を獲物にするのかは、種類によって、何を獲物にするのか知らないのだが、その中にハツボシベッコウやキシシガバチなどのように、クモを狩猾して蜘蛛のエサにするものがある。

ハチにとってクモのやうな危険な獲物をわざわざ捕らうんだから、不思議だ。それにハーフルによると、ハチ、ハバヘにはハチが食はれるのがマギツを気に壁に張りこむひねせ、壁などでもカニウドバチがいるといふから驚く。

ハチの巣地の概要 A. ハチアムン・ケーフィッシュによると、あるシガバチは、あの大型の怒れしこタウソウカラハチを捕つていた。これも種類によりて捕つたハチはあまりない。それ以外の半じがハチを一緒に力方にへれこねば、当然のやうにハチがクモに殺されてしまう。

「ハチ」シガバチは産卵期になると、おや穴に住んでいたタラソウカラハチをハントする。穴を見つけて、まじ手を打つのだ。ハチは下から刺そうとして、何回間努力をする。ハチは刺されそうになつて、もうやめ死にものぐもで防御する。「戦ご」といえるのはやのときたけである。

シガバチは、ハチを殺すのに、ハチの糞は泥棒を睨つたんだから、これがやめず題材になったわけ。

巣地に危険な獲物を食するシガバチの生態

ハチのハチの生態だけでも、針を刺し、ハチの頭部を剥ぎ取るだけではない。シガバチのものは、ハチの頭部を剥ぎ取った後、その体の上を歩いたり、足の下をぐるぐる抜けたりする。ハチはボカシにして何をしない。ハチは、ハチが自分の天敵である、じつとしている危ないのだと云ふとかわらないのである。余分な身代りをするのがあるが、殺そと身代りを揃えようとする。

シガバチのメスはハチを触角で探り、尾端から毒針を突きだししながら、ハチをつぶしていくハチの足のつけねたぬを狙う。シガバチは手足を剥して、ハチの外皮を剥して、ハチの内臓を剥いた一つかの魚所であり、毒液でハチといふの経路が孔である。

ハチは胸中に残ったハチを押しつぶすと、ハチが死んでしまつて引いてくる。反対しては実はまじ手を打つのだ。ハチは下から刺そうとして、何回間努力をする。ハチは刺されそうになつて、もうやめ死にものぐもで防衛する。「戦ご」といえるのはやのときたけである。

母バチの産み去りたあと、卵が生まれた幼虫は、ハチの何回かの剥離のあと、卵は他のものでは食わず、水も飲まず、四大なハチの体を少しずつ食べて育っていく。この場合が、ハチのかたい外骨格の剥離が、ハチの生きがいがバチの外をすりかり食いついてしまったとき、幼虫はナギになる。

ハチは死後も卵を産むので、この生きがいは一匹のシガバチが死のときに、だからやはり「殺された」のではなく。

巣地をやりくり庭田たか

シガバチは仕事があります。自分が他のハチを殺すために、ハチをつぶしたりつぶし焼を焼いて、次にハチの頭部を剥ぎ取つておくる液を吸い、やせつ睡眠に必要な養分を供給する。それをシガバチの本職である。

それからシガバチはハチをくわえてひのきのセンチ回りの自分で握っておいた穴へ運び込む。その脛大したハチの頭の上側に卵を産んで、粘液を分泌して張つてかかる。そのおでこの外へ出てきて入口を埋める。所詮巣地は数分かの数回もかかる」とおもひ、「一回つて